

七沢石のウンチク

七沢石とは

七沢石と呼ばれる石は、七沢の鐘ヶ嶽東方山麓から切り出される“七沢石”と清川村の谷太郎川沿いの“煤ヶ谷石”、伊勢原市日向の“日向石”の各々の石切丁場で切り出される石を総称して呼ばれることが多い。石の種類は火山灰が固結してできた凝灰岩(ぎょうかいがん)で比較的軟らかい材質です。

なぜ七沢石がもてはやされるようになったか

戦国時代を経て江戸中期になると平和の時期を迎え、築城の必要もなくなり、庶民の間では信仰心が深まって仏像・各種石碑を造ることが盛んになったことがあげられます。加工がしやすく、安く、大量に造れるという庶民の要望に七沢石がぴったりでした。

七沢石の始まり

七沢石が掘られ始めた年代は明らかではありませんが、残っている石造物の彫刻から江戸時代初期かと推測されます。しかし、①石碑・墓石などは外国産の良材が入手しやすくなった。②石臼など七沢石に適した製品の需要がなくなった。③建物の基礎石の類がコンクリートに代わって安く大量に造られるようになったことから、昭和38年5月を最後にその採掘は行われなくなりました。

七沢石の製品は

昭和初期の七沢石の製品は、専売臼(精米用、精麦用、タドン粉用)、米つき臼、粉ひき臼、墓石、石鳥居、寺社献納物など多様なものが造られていました。その販路は広く、東北地方、北海道、南洋諸島、米国までにも及んでいました。

信州高遠の石工(いしく)さん

七沢石の開発は信州高遠の石工によって行われました。信州から甲府、津久井をへて煤ヶ谷に入った石工たちは、煤ヶ谷の石切丁場を見つけたあと七沢、日向に入り、新たな石切丁場を見つけたことが七沢石の生まれるいきさつです。高遠の石工たちは出稼ぎできていました。出稼ぎの理由は、①石の採掘は冬は水分が凍るため、春から秋の彼岸までに行われました。②高遠藩では出稼ぎは許したが、他に移り住むことは許さなかった。藩内の田畑を荒らさないよう耕作の時期には村に帰るよう指示しており、石工からは石切運上金を取っていました。

奥半谷の石工居住地

七沢の鐘ヶ嶽東方山麓に石工居住地跡があります。明治になってからは高遠の石工は石屋も兼ねて七沢に定住するようになりました。(昭和14年の石工組合の名簿には52人が記載され、そのうち七沢の人は24人、他は日向、煤ヶ谷の人で、多くの人が七沢石の石工あるいは石屋としてかかわっていました) 大正12年の関東大震災以前は奥半谷には5軒の石工が住んでいましたが、地震で山が荒れたため全員が七沢の集落へ移住しました。奥半谷の居住地から子供たちは毎日久保屋敷という場所にある小学校に通ったそうです。子供たちは学校の帰りには、豆腐やランプの油を買って帰ったそうです。居住地には平塚須賀や伊勢原の魚屋が天秤棒を担いで魚を売りに来ました。『中には、舌がピリッとする魚もあった』とは、七沢の石屋さんの思い出話です。

七沢石の採掘

七沢石の採掘は大掛かりな機械は使わずに手作業で行っていました。なるべく、ノミやテコを使って掘るようにし、大正初期になると特に大きな石や下側を掘るときには火薬を使っていました。

奥半谷の奥にはタマネギ石の回廊が

奥半谷石切丁場の北側に続く道は下り坂で、七沢自然ふれあいセンターへ戻る方向になりますが、この道沿いにはタマネギ石の回廊があります。玉葱状構造(通称:タマネギ石)英名: Onion Stracturer 地表で風化を受けた岩石が恰もタマネギの皮をむくように、同心球状の薄い殻となって表面から剥がれるために生じた多殻球状の構造をいいます。